
kindanrenai

華羅腐瑠うさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

kindanrenai

【Nコード】

N2383BA

【作者名】

華羅腐瑠つちぎ

【あらすじ】

大好き、大好きなの杏・・・

(前書き)

ガールズラブ

GLです

お気をつけて

私は桃^{もも}、高校1年生、好きな人は隣に座っている杏^{あん}、女の子。

杏は私の小さい頃からの幼馴染で私の大好きな家族と同じくらい大切な女の子、私よりずっと頭もいいしスポーツだって、顔だつてなんだつて上なのに鼻にもかけないし私を馬鹿にしたりしないし口下手な私を庇ってくれたり察してくれたり、すごくいいこ。

だからかな？中学・・・2年生の頃だったかな？杏に初めて彼氏が出来たの、私そのころはまだ杏のこと好きつて気付いてなかったんだ。

気付いてたら・・・どうなってたんだろうね？

杏は私の大事な親友、杏は彼氏がいるのに彼氏と同じ扱い、どちらのこともちゃんと考えてくれて「3人で帰ろう？。」つて誘ってくれることもあった。

でもそのたびに私はなんだか「お邪魔虫」なんじゃないか、そう考えるようになっていった。

「それ本当？。」

「マジ大マジウケルよな〜。」

「桃もそう思うよな〜。」

にこにこ笑う杏、私といるときとはまた違った楽しそうな顔。

「うん、そうだね、面白い。」

あいまいな返事しか出来ない自分に腹が立つ。

そんなことが続いて私は「用事があるからゴメンね」そう言つて杏の誘いを断つていった。

用事なんてないから誰もいない家に帰り宿題をして前の彼氏^{あいつ}がいなかったころの杏と撮った写真をポーッと眺める。

あいつさえいなければ、あいつさえいなければ杏は・・・そんなことを考えていたからかな？そうだったらすいすいと思つ。

杏と彼氏^{あいつ}が別れたらしい。

別れた原因はあえて聞かなかったけど。

やっと少し前の私達にだんだんと戻っていったんだけど・・・やっぱり杏はかわいいからまた高校に入ってすぐ先輩から告白されて・

今度はどんなに願ったって別れるような雰囲気はない。

「ふっ・・・。」

絶対かなわない恋に気付いてから何年かな？苦しくて苦しくて涙があふれる。

そのあと学校が終わるとすぐ走って家へ帰ってベッドでいろいろ考えていたら携帯の着信音が流れる。

この着信音は杏、杏とおそろいの着信音。

携帯を開くとメールの表示。

内容は明日桃わたしの家に遊びに行ってもいいかというもの、私はすぐ元気になり（我ながら現金だと思う）メールの返信を送った。もちろん返事は全然大丈夫！！　いいよ！という内容。

次の日、別にどこかへ出かけるわけでもないが好きあんなこがくるのだからすごく悩んでふわふわの杏に選んでもらったセーターと下はスカートを穿いた。

「もーもー？あ、おばさん・・・すみません、あ、はい、おじやましまーす。」

トントントン階段を上る音がする。私の部屋まで約20歩。

・・・コンコン「もーもー？入るね？」

「おはよう。」

にこりと杏は笑う。

「おはよう。」

私も控えめに挨拶を返した。

「あ、このあいだのセーター着てるんだね、やっぱり桃似合う私結構センスいいのかな？」

「すっごくいいよ。」

そんな女の子特有の洋服の話をしていただけと途中から杏の新

しい彼氏、高校の先輩の話になった。

「それで・・・そのときさ薫が・・・」

もう名前呼びなんだ・・・聞きたくない聞きたくない聞きたくない・・・。

「聞いてる?・・・キャツ・・・」

杏が小さな悲鳴を上げた。理由は私がいきなり杏の細いきれいな肩を強く握ったから。

「ど、どうしたの?桃」

恐怖のせいでいつも自信いっぱいキラキラした瞳は大きく揺れている。

「このうえない優越感。」

私は間髪いれずに杏に口付けた。

「んーんーんーっ。」

杏は小さな抵抗をする。

ずっと閉じていた・・・罪深さを感じていたまぶたを開ける。

映るのは杏の赤くなった顔・・・と、丁度私達がよく見える鏡に映っているのはいつもの自分とはまるで別人の欲深い怪物がきれいな女神のような少女に口付けているなんとも目をつむってしまいたくなるような私にはそう思えた。

何をしているんだ私は、そう思い杏から唇を離す。

「はあはあ」肩で息をしている杏。

後悔が押し寄せてきて涙がとまらない。

バタバタバタと杏が部屋を走って出て行く。

私は・・・どうすればいいんだろうか?

ふっと自分の唇に触れる。思い浮かぶのはさっきの光景。すごく官能的な光景。

後悔は勿論しているのに思い出すだけで沸いてくる優越感。

杏のファーストキス、先輩悪いですが頂きました。

(後書き)

はい、2作品目ですがいきなりの悲恋系百合
意外と得意な禁断系&同姓愛

・・・完全俺得ですみません・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2383ba/>

kindanrenai

2012年1月6日00時47分発行